

忘れん坊



小城ゆり子

忘れん坊

小城ゆり子

カギ

カギがない！　これから出かけなければならないのに、家のカギがない。いつものバッグの中  
にない。外出用のハンドバッグの中にもない。その辺探しても、ない。ああ、時間が迫っている  
。私はあわてて合いカギを探し、それで家を閉めて出かける。

しかし、金庫のカギはどうするか？　私は、いつも、家のカギと金庫のカギとを一緒にキーホ  
ルダーにさしていたのだ。それがなくなった……。金庫のカギも合カギがあるかもしれない、と  
思い直す。

数時間後、外出先から帰ってきて、またカギを探す。金庫の合カギはあった。これでなんとかな  
るか。

なくなったカギはどこにあるのだろうか？　私はカギを持って家を出て、カギで玄関を開けて家  
に入ったのだから、当然カギは家の中のどこかにあるはずなのだ。本棚や箱の中、一生懸命に  
探す。どこにもない！

夫が帰ってきた。

「ねえ、私のカギ、知らない？　どこにもないのよ」

「知らないよ。その辺に置いたんだろ」

私が物をなくすのは、日常茶飯事のことだから、彼は驚かない。

「ねえ、どうしたのかなあ、いつもこのバッグに入れていたのにねえ」

そのバッグの中にはなかったのだ。

それでも、未練たらしくそのバッグをさかさまにしてみる。

あった！

カギはいつものバッグの中に入っていた。どうしてだろう？　さっきはなかったのに。

差し歯

年末、今日で歯科医も診療終わりというのに、歯を磨いていたら、差し歯が取れた。あわてて  
紙に包んでハンドバッグに入れる。

歯科医に電話する。

「すみません、差し歯が取れてしまって……。年始はいつから診察ですか？」

「1月4日からです」

「じゃ、その日にお願いします」

「時間は10時でいいですか？」

「はい」

「じゃ、その時、取れた差し歯も持ってきてくださいね」

「はい」

そして大晦日とお正月が来る。差し歯無しでみっともないので、口はインフルエンザ用のマスクで覆う。誰も何も言わなかった。休日で、人と会うことも少なかったし……。

さて、4日、ハンドバッグの中を見たが、肝心の入れたはずの差し歯がない。確かに紙に包んで入れたのに……年末年始の数日間、確かめなかったのがいけなかったのだろうか？

しかし、先のカギのこともある。きっとハンドバッグの隅にひっかかっているにちがいない。と思ったが、差し歯はなかった。しかたなく、また歯科医に作ってもらうことにして、出かける。

「あの一、すみません、差し歯、なくしちゃって」とおずおずと言うと、

「土台ありませんね」と歯科医が言う。

「土台？……ああ、差し歯だけあったとしても、ダメだったんですか？」

「土台は見つかりませんでしたか？」

「ええ、気がつかなくて」

私は歯の土台を飲みこんでしまったのだろうか？……嫌だなあ、大丈夫だろうか？

「じゃ、土台を作るところからしましょう」

歯科医は型を取ってくれた。でも、この日は、差し歯無しのまま。またマスクで口を隠す。

1週間後、土台を入れてもらい、仮の歯をつけてもらった。やっと、マスクなしで歩ける。

そして、また1週間後、めでたく新しい差し歯をつけてもらった。かなりお金がかかった。古い差し歯を無くさなかったら、もう少し安くなったのだろうか？

## 牛乳

冬だからシチューを作ろうと思った。たまねぎ、じゃがいも、にんじん、シチューの素はある。マッシュルームと鶏肉を買いにでかけた。近くのスーパーに鶏肉はもちろんあったが、なぜかマッシュルームがない。ぶつぶつ言いながら、少し遠くのスーパーまでマッシュルームを探しに行く。あった！

マッシュルームの入らないシチューなんて、と思ったのだ。

で、鼻歌交じりで料理して……そろそろ夫の帰ってくる頃だ。鶏肉や野菜も煮えたし、ここでシチューの素を足して……はっとした。牛乳がない！

クリームシチューの素はやはり牛乳で溶かないと……水ではおいしくないし。

しかし、今、冷蔵庫に牛乳はない。買ってくるか？ あとちょっとで夫が帰ってくるのに、またまたスーパーに行くのは大変だし……何か牛乳の代わりになる物はないか？

物色してもない。いや、ミルク紅茶の素があった。これでいいか。それをお湯で溶いて、シチューの素と一緒に、ええい！とばかりに鍋に入れる。これでどんな味になるか？

ずいぶん心配したが、少し濃厚な味になっただけで、食べることはできた。

夫は何も気がつかなかった。

## 旅行切符の確認行為

いつもいつも忘れっぽいので、私は不安になってきた。

2月1日には、修善寺温泉へ一泊旅行を計画している。JRのびゅうプラザで予約したのだが、切符は忘れないか、旅館の宿泊券は忘れないか、心配で心配でしようがない。何度も確認した。

乗車券は千葉―三島間となっているが、千葉ではなく、それより二つ東京よりの稲毛から乗車できるだろうか？ JRに電話して確かめてみた。しかし、この切符で自動改札が通れるのだろうか？

時間に遅れないだろうか？ 稲毛から出発するのは、ラッシュの時間になるが、ぎゅうぎゅうづめで困らないだろうか？ 東京駅で踊り子号のホームまでスムーズに行けるだろうか？ 心配すればきりが無い。

夫の提案で、朝食を摂らずに家を出る。東京までの快速電車では、親切な若者が私に席を譲ってくれた。東京駅で喫茶店を探すのに、少しまごついたが、どうやら見つけ、パンとコーヒーを頼む。

修善寺行き直通の踊り子号に乗る。平日のせいか、席はばらばらだった。

午後1時頃修善寺に着いて、旅行案内にあった虹の里へ行き、小さなSL（蒸気機関車）に乗ったりして、だが、ちょっと時間をもてあました。温泉街の蕎麦屋で蕎麦を食べていたら、雨が降ってきた。出かけるとき、雨や雪が降るといっているので、傘を持ってきて、良かった。2時になっていた。

旅館のチェックインは3時なのだ。

途中で喫茶店があったから、「ここで時間をつぶしていかない？」

と夫に提案したが、彼は私よりも旅なれているから、

「大丈夫だよ。少し早く着きましたがつて、言えばいいんだ」

と言う。

旅館はすぐに見つかった。

日本間を洋間に改造した部屋。床の間やツインベッドがある。ゆっくり休んだ。

温泉に入って、骨休め。

部屋の窓の下を桂川が流れていて、旅館街の明かりがきらきらして、とても美しい景色。テレビが関東地方は雪だと言っているが、ここでは雪は降っていない。

また帰りの切符の確認行為などする。切符がないと、よけいなお金を出さなければならない。心配症の私はお金は余分に持ってきたが、結局、ほとんど使わなかった。

夜。ここも雪が降るだろうか？ 明日、雪道を歩くことになるのだろうか？ ずいぶん心配したが、雪は降らず、雨も止んだ。

翌日、梅林へ行こうと、石畳の山道を歩き……行けども行けども、梅林に着かない。

「ダメだな、これは」

夫がダメを押すので、元来た道を引返す。

後、修善寺の名所旧跡を見て、駅に帰る。時間がありすぎる。

駅前の蕎麦屋で蕎麦を食べ、旭滝というところへはバスで行けるか、聞く。

「バスでは歩きますよ。タクシーでないと」

「タクシーで行って、帰ってきて、どのくらいかかるの？」

夫はお金が心配なのだ。

「3千円くらいですよ。いらっしゃるなら、手配しますよ」

蕎麦屋の知り合いのタクシーを呼んでくれた。駅前にタクシーがいっぱい並んでいて、どれも人待ち顔なのだ。

で、タクシーで旭滝へ。すっごく高い所から水が流れていて、圧巻だった。昨日雨が降ったので、ちょうど良いのだという。

踊り子号の発車3時までにはまだまだ時間があったので、私は駅の売店でお土産も買えた。お土産というのは……自分の行っているカルチャーセンターの小説教室とユーモア文芸教室の人たちにあげるお菓子を買ったのだ。で、発車。

忘れ物をしないよう気をつけて、不安な旅だったが、夫が一緒なので、心強かった。

## 手袋

旅行に行く前に、新しいスーツとコートを買った。タイツと靴下も買った。手袋はあるから、いいだろう。

去年からの手袋はたくさんあるのだが、気に入っているのは、えんじ色の手袋だけ。あとは、気に入らない。

私は外出する時、いつもこのえんじ色の手袋をしていった。行く道々、熱くなると、手袋をぬいでコートのポケットに入れる。毎日、これで問題なかった。

ところが、この手袋が片一方、なくなってしまったのだ。いくら探してもない。

つままないなあ……と、残念。

きっとコートのポケットに入れるとき、無くしてしまったのだろう。

で、しばらく、気に入らない別の手袋をはめていたが、100円ショップに行ったとき、思い切って茶色の手袋を買った。これでこの冬の間くらいはもつだろう。

新しい物を買うと、古い物が出てくるのだろうか？

家の近くを歩いていたら、道路の灌木の葉の上に、なくした手袋が乗っていた。

きっと道に落ちていたのを、親切な人が灌木の上に乗せてくれたのだろう。そういえば、前にも一度、これと同じようなことがあったような気がする。

## A 診療所

24日の早朝。朝かと思って起きたのに、まだ夜中だった。がっかり。

あ、今日は水曜日？ 17日？ いや、17日は先週だ。今日はもう24日ではないか。私は17日にA診療所に行って、診察を受け、骨密度の検査をしてもらうことになっていたのだ。予約していたのに、それをすっかり忘れていた！

私は方々の病院に通っているのだが、内科はこの近くのA診療所で、高血圧と骨粗しょう症の薬をもらっている。

さて、どうしよう……1週間も忘れたままにしてしまった。薬があったからいけなかったのか？ 薬は、去年の秋、先生が「冬、新型インフルエンザの大流行があって、診療所がパンクしちゃうといけなから、今、薬は多めに出しておきますね」と言って、大目にくれたのだ。

夜中なのに、眠れなくなった。どうしよう……どうしよう……朝、A診療所に電話して今日検査と診察をしてもらえばいいのだ。それはわかっている。でも、眠れない……朝までまだ何時間もあるのに。

しかたなく、睡眠導入剤を飲んで、やっと寝た。

朝、A診療所の電話が通じるのは、8時半からだ。朝食の支度をし、食べ、洗濯をし、身支度を整えて、さて8時半。電話する。お話中。いつもこうなのだ。しばらくして、また電話する。今度は通じた。

「すみません、私、17日に診察と骨密度の検査をしてもらう予約をしていたんですが、忘れてしまって、申しわけありませんが、今日、検査・診察してもらえないでしょうか？」

「9時半に来られますか？」

「はい」

さて、あわてて、洗濯物をほし、食器を洗って、9時10分に家を出る。夫はもう前にゴルフ練習場に行っている。

診療所まで私の足では20分では行けない。5分遅れてしまった。

受付で説明して待合室へ。

自動血圧計で血圧を測る。家を出るときは、とても血圧を測る時間などなかったのだ。

少したって、看護師さんが来た。

「小城さん、今日は検査だけでいいのではないですか？」

「えっ？」

「お薬、まだあるでしょ」

「あのう」

「先週、17日にいらしてますね。まだ1週間しかたっていないよ」

「あっ？」

そうだ、今日はまだ2月24日だったのだ。私は2月17日にここに来て、3月17日の予約をしたのだ。

なんということ。私は検査の日を忘れたのではなく、今日がまだ2月で、3月ではないことを忘れていたのだ。

「検査だけなさいますか？」

「はい、そうします」

すっかり恐縮して、両手の骨のレントゲンを撮ってもらって、会計して、帰る。440円払った。

家に帰る途中、スーパーで買い物をして、お昼の用意をする。夫がなかなか帰ってこないのので、先に独りでご飯を食べる。

夫が帰ってきた。

「あのね、私ったらね、今日が2月なのにね」と自分の失敗を話す。

「あ、どこかしら、診療所の領収書。さっき、ここに置いたのに」

置いたところがない。

困った。私は税金の医療費控除をしてもらうため、領収書はちゃんととってあるのだ。それなのに……。

「どうしよう、440円なんかあきらめようか」

「どっかに置いたんだろ。さっきからこの家はお母さん一人で、誰もいなかったんだから、自分でどこかにしまったんだろ」

言われてあちこち探す。どこにもない！

あ、そういえば、「骨密度の検査」って、どこかに書いたな。どこだっけ？ 手帳？ 手帳に書いたのか？

ハンドバッグの中の手帳を見たら、領収書も挟まっていた。

これにて一件落着。

## サバの味噌煮

私の健忘症は、かなり前から始まっている。現在71歳の夫が、まだ現役で働いていたとき、「うちのパートさんたちが、びっくりしていたぞ」と彼が笑いながら言った。

「うちは、献立が大きい紙に書いてあって冷蔵庫に張ってあるって言うよ」

「だって忘れてしまうんだもん」

私は毎日の献立をメモして、そのメモを持ってスーパーに買いに行く。それだけではまだ忘れそうなので、買い物の後、紙に書いて冷蔵庫に張っておく。それを見て、夕食を作る。それが、夫の会社のパートさんたちには、おかしいらしい。

「あなた、書いておかないと、別の物を作っちゃうの？」

と、友だちが笑う。

「何を作ればいいのか、わからなくなるのよ」

こうしてもう10年以上、私は冷蔵庫に献立を張り紙している。

昨日も、張り紙した。

ご飯

みそ汁（わかめ、じゃがいも）

サバの味噌煮

まいたけとえのきだけの酢の物

ほうれん草のおひたし

もずく

べったら漬

サバの味噌煮というのは、実は子持ちカレイの煮付けをしようと思い、スーパーに買いに行ったのに、その日はそれがなかったので、急きよサバの味噌煮に変えたのである。

3時に炊飯器のスイッチを入れる。2時間のタイマー炊飯。うちはいつも5時過ぎには夕食にしている。夫が定年退職して、家にいるようになってからは、ずっとこうである。5時では早すぎる、夜お腹が空くだろうと言う人もいるが、私に言わせれば、夕食を早くしないと、おやつを食べたくなるのだ。もちろん、夜は早く寝る。夜食を摂るなど、もつてのほかである。

4時半頃、食事作りにとりかかる。いつも、たいてい30分くらいでできるのだ。

サバは味噌煮のたれをフライパンに入れて、沸騰させ、そこへ静かにサバの切り身を入れて、落とし蓋をする。10分でできあがる。夫は魚や肉は多く食べたがるので、サバの切り身は3切れ買ってある。私は1切れでいい。

ご飯が炊け、食事の用意ができたので、居間のテーブルにおかずを並べる。ほうれん草、きのこの酢の物、もずく、みそ汁、ご飯……。

食べ始める。何か小さいおかずばかり。

食べながら、夫が言う。「主菜がないな。何か忘れていないか？」

「あ、サバの味噌煮！」

せっかく作ったのに、忘れていた。

あわてて台所に行き、皿に盛ってくる。

ちゃんとおいしくできていた。

## アルツハイマー病

実は私は双極性障害という病気があって、ずっと精神科に通っている。双極性障害、わかりやすく言えば躁うつ病。はしゃぎすぎの躁と沈みすぎのうつが繰り返す。現在は、躁もうつも、おさまっているが、まだ、夜は睡眠剤を飲まないによく眠れないし、日中もときどき不安に襲われる。

不安というのは……いつもあるのは、外出するとき、電気器具やガス器具の元栓をちゃんと締めたかどうか、気になるというもの。気になって、何度も点検する。家を出てからも、気になって、ときには家に戻って確かめたりする。家が火事にならないか、心配なのだ。

夫と一緒に外出するときは、私がおもたもた点検ばかりしているので、夫がいらいらして怒る。

あと、生活上のさまざまなことが不安になる。

一つは、自分の病気。私は病気の百貨店みたいに、いろいろな病気をかかえている。双極性障害、高血圧、骨粗しょう症、腎硬化症、そして眼科では白内障と飛蚊症。去年の秋は変形性膝



関節症になって、整形外科に通った。いずれも酷くならない病気で、普通に暮しているのだが、病気が酷くならないか、心配なのだ。

精神科の薬の副作用で、腎臓を悪くした。で、問題の薬は飲まなくなったが、腎臓は元に戻らない。何か自覚症状があるわけではないのだが、検査をすると、悪く出る。そして腎臓病に特効薬はないそうだ。人工透析をしなければならなくなったら……と思うと、不安でたまらない。

それに、私は、とても忘れっぽいので、認知症の初期ではないか、と心配なのだ。満年齢66歳。認知症になってもふしぎはない。

精神科に行って、先生に診察してもらったとき、

「私、アルツハイマー病じゃないでしょうか？」

と聞くと、先生はいつも、

「アルツハイマー病ではありません」と断言する。

今はそうかもしれない。しかし、私がアルツハイマー病にならないという保証はどこにもないではないか。

こんなに物忘れが酷くて……大丈夫だろうか？

不安だから、そういうことを考えるのだろう。考えたってしょうがないのに。物忘れするたびに、私はいつも、不安になっている。